

---

# 空からの贈り物

くえいさ～

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空からの贈り物

### 【Zコード】

Z7540A

### 【作者名】

くえいせー

### 【あらすじ】

空からふってきた魔女つ娘のコメディーです！見ていくつね

## 第1話・空から落ちてきた核弾頭（前書き）

初作品です！まだ文章力が足りない私ですが暖かい目で見てください

## 第1話・空から落ちてきた核弾頭

「やつべ～。すっかり遅くなっちゃった！」

ただ今、バイトからの帰り道を全力で走っております！  
今日中にDVDを返さないと延滞になっちゃう。  
え？何を借りたかって？

それを聴いたらおしめえよ～、あんちゃん！

でもこんな時に限って残業をせらるなんて…。

……「これはきっと陰謀だ！」

俺は、バイトくんだから別にこき使つてもいいよね～ といつ思想の  
人間の陰謀に填まってしまったのだ！

……はあ…少し疲れたから歩こう。

「夜風が気持ちいい～」

布団があれば寝ちまいそっだ。

ふと夜空を見上げる。

街灯が少ないから星達がより一層輝いて見えた。  
その中の一つがピカピカ光っていた。

「何だあ？ UFOかあ？」

あ、また光った。  
さつきよりも大きい。

「なんか段々近づいているような気が…。ま、いつか

俺はまた歩きだした。

家まであと角一つの所まで来た時、さつきの輝きが気になつてまた顔を夜空に向けた。

輝きはまた一段と大きくなつていた。つていづか目視で分かるくらいに確実に近づいている。

「もしかしてこいつに近づいてきてる?」

そう気が付いた時には既に

「『ゴロゴロ…』

と飛行機の離陸の時みたいな轟音が鳴っていた。

「もしかしてマジ…ン!…マ…アンなんか!…?」

それから俺は全力で逃げた!逃げに逃げた!自宅のアパートなんかもう通り過ぎてるよ!

「何なんだよー!今日は厄日か!…?」

と俺は石に躊躇して、ゴロゴロガツシャーンと派手に倒けてしまった。

「イテテ…。ちくしょーーー!こんな時に…。さつきの星は!…?」

上空を見上げると既に田の前まで来ていた!

「ソロモンよー!私は帰ってきた!」

「ゴスッ!」

「ヌルオツ！」

俺は下腹部に核弾頭をぶち込まれ、薄れゆく意識の中で『骨董屋何かしてないのに…』と心の中で呟いた。

## 第2話..めまいのへいへいかひきて来た

悪夢だ…。

空から突然降つてきた核弾頭。

南極条約で禁止されたんじやないの?  
つてか、何で南極なの?

「……さん」

DVD返しそびれで俺、死んでしまうのか?

「…宏…さん」

誰が延滞料払うんだか…。

「孝宏さん、起きてくださいーー」

もう、お先真っ暗だ。

「天誅!—!」

「スツー!

「ふー!ー!」

ようやく田が覚めた俺。  
「まー…俺の部屋?

「やつと田を覚ましたね?」

……」の娘、誰？

髪の毛はピンクで腰の辺りまである。

瞳は黒で見つめると深い深い闇へ引きずり込まれそうだ。肌は逆に白。いや、純白のほうがしつくつくるだらう。

「孝宏さん、大丈夫ですか？」

「…さみ誰？どうして俺の名前知ってるの？」

当然だよな。

見ず知らずの娘に名前を知られているってどういう事？見た感じと言うか、ピンク色の髪をした悪趣味な女なんてバイト先にも友達にも親戚にもいない。

「平山孝宏さん。年齢は22歳。大学4年生でアルバイトをしている。彼女いないうちと年齢は同数。間違いないですか？」

ストーカー！？こいつストーカーなのか！？

俺のプロフィールを全国の皆さんに晒しやがって！

「てめえ誰だ！場合によつては出ぬといひ出す！」

「口を慎め小僧！」

バキつ！

「あう……」

右フックを顔面に食らいました…。

「それはそうと…先程は失礼致しました…」

打つて変わつて今度は申し訳なさそうな顔をした。しかも瞳を潤ませながら上目使いで…。

これで妹属性が付いていたら即攻でガバーと行くんだらうが、残念ながら俺にはそんな属性はない。  
どちらかと言えばチアリーダー属性だ！

と、話が反れてしまった。

「さつき？何かあつたつけ？」

思に当たる節はあるようなないような…。

「すいません。急いで下界に来たのですから…。スピードを出しすぎて、コントロールが出来ずに孝宏さんにぶつかってしまった」

下界？何言つてんだ？ぶつかつたつて……

「あーーーお前もしかしてさつきの核弾頭」

「こんな可愛い娘を捕まえて誰が核弾頭じや、コラアー！」

怖え…。

つてかコロコロと感情変わり過ぎだ。

「つてか、あんた誰？名前は？」

「人に名前を聞く前に自分から名乗るのが礼儀ではなくて？」

お前はどこのお偉いさんの令嬢だよ。

それにさつき俺の名前とかもうもらお前が全国ネットで晒したじやねーか。

……まあ、逆らうと怖そだだから素直に従つとへか。

「俺は平山孝宏だ」

「はい。知つてます」

おちょくつとるのか貴様。

「私はソフィア。魔法界ニルヴァーナから修業のためにきました。

これからよろしくお願ひしますね」

この人はあれだ。頭がパーなんだ。魔法とか言つてゐし。

「ここはファンタジー世界じゃねーぞ！」

とリリでさつきソフィアが言つた言葉に疑問をもつた。

「よろしくお願ひしますつてどいつう事？」

「あなたは言葉の意味も分からぬのですか？だから彼女も出来ないんですね。哀れな人間だこと」

カツチーン！

「あー！それを言つちやうんだ！せっかく一部屋貸してあげようと思つたのに。気分が変わつた。出てけ！」

「そ、そんなん…。私には孝宏さんしか頼れる人がいないんですよ」

「

再び瞳を潤ませて上目使いを取る。  
でも俺には利かないもんね！

「知るかそんな事！それに何で俺なんだ？他のヤツの所へ行けばいいだろ！」

ガチャ

「うだうだ言わないで素直に

「はい」

つて言つたほうが長生き出来ますよ？」

「ふ…ふあい！」

言つたよー言つたから口にガトリング突つ込むの止めて！裂けちゃう…

こうしてかなり脅迫氣味に自称魔法の国からやつてきたサリー…  
基、ソフィアが同居することとなつた…。

ハア…。

「あ、そつそつ。孝宏さん」

「な～に～…」

「えつちなのはいけないと思こます…！」

バキッ！

「あ、あ、あ、！レンタルDVDが！」

後日、割られたレンタルDVDを弁償しました…。

### 第3話・キャンパスライフ

朝。

目覚めを促すように小鳥の囀りが響き、  
カーテンの隙間から朝日が差し込み、俺の顔を照らす。  
清々しい。

いつもならそういう思えるんだけど…。

「孝宏や～ん。朝ですよ～？」

こいつのせいで俺の平々凡々とした日常が非日常に変わってしまう  
た…。

こいつはソフィアと言つ昨日脅迫氣味に（と書つか、完全に脅迫だ  
けど…）

居候になつた変人女だ。

自称魔法使いらしいが、冗談はその髪の毛ぐらいにして欲しいもの  
だ。

「今日の講義は昼からだ。まだ時間があるから寝る」  
ジャキッ

「ぐだぐだ言わずに起きましょ～。講義とやらに行く前に死んじゃ  
いますよ～？」

「分かつたー分かつたからガトリングを向けないでー」

まったく…。こいつと一緒にだと命がいくつあっても足りないよ。

「朝ごはん作つたので食べてくださこね～」

朝飯…。これがか？

ちなみにメニューは

味噌汁にご飯。

ここまではいい。日本人のスタンダードな食事だ。

問題なのは、>肉厚のステーキく。

重い。重すぎる。

「『めんけど、ちょっと』

「たーんと召し上がり」

俺は再びガトリングを突きつけられながら朝飯を完食した。い、胃が凭れる…。

それにしても…。

「何で銃器なんか持つてるんだ? それにこりじゃ銃刀法違反で捕まるぞ?」

「心配御無用! 捕まえる前に殲滅しますので それにこれがあつた方が魔力を使わずに済みますし」

とソフィアは持っていたガトリングを頬擦りしている。

…普通に怖いよ。あんた。

「あ、やうやう。言い忘れてたけど、こいつでは魔法を使わないようだ!」

「え? 何ですかあ?」

「あたりまえでしょう! 魔法なんてクレイジーなモノが有るなんて知れたら、研究所に送られてあんなことやこんなことをされちゃうだ!?」

やうじに手つきでソフィアに迫る。

「ヒツチなのはいけないと私は思います！！」

「はい。すいません。私が悪うございました。

だからガトリングを寸止めで回すの止めてくれますか？」

：一応、分かつてくれたみたいだ。

昼。

俺はキャンパス内にいた。

大学は光学系の大学で俺はソフトウェア学科を選考している。ソフィアはどうと、家で待機するように命を賭けて懇願した。あいつがいると何をしてかすか分からないからな…。

「今日の講義どうだったよ？」

俺の友人、正人が話しかけてきた。

襟足は長めの茶髪男だ。

女の子にはそこそこ人気があるらしく、よく話し掛けられているのを見かける。

「あ～、ダメだね。殆どが講師の自慢話になつてた」

「だろうね～。あのハゲチャビンの講義はいつも自分の武勇伝になつちまうからね」

「ドブ川すくつでドリンクバーとか言つてた」

「オリ ジのネタじやん」

そんな他愛の無い話をしていると女の子が近づいてきた。

「あ…あの…」

黒のセミロングを両端で束ねている。

眼は少し垂れ下がりのどこにでもいる普通の女の子だ。  
少し控えめな態度は俺の好みだけど、こういう状況の場合、正人目  
当てだらう。

「ん~? どうしたの?」

と、いつもの様に正人が対応する。

「あ、いえ。そちらの方にお話が…」

「え? 俺?」

意外だった。

正人もそんな顔をしている。

自慢じやないけど、この大学にに来て話し掛けられたのは正人以来  
初めてだ。

「あ、あの…これ読んでください!」

女の子から四つ折にされた一枚の紙切れを渡された。

こ、これってまさか!

女の子は顔を赤らめながら走つて俺達から離れていった。

「おいおい! これってラブレターじゃね! ?  
「か、かもね」

すこし緊張氣味に四つ折にされた紙を開く。

『開いてます!』

紙にはそう一言だけ書いてあった。

何の事？

「あ、おー…」

正人があずむかずと話しかける。

「何？」

「『開いている』ぞ」

「何が？」

「…社会の窓。しかも全開

「な、何い！？うわホントだよーー！」

慌てて閉める。

俺、恥つ…。

少し精神的にグロッキーになつてると聞き慣れた声が聞えた。

「孝宏さーん！お弁当忘れてますよー？」

…来やがつたか。規格外女め…。家で待つてろつて言つたはずなのに。

わざと置いていつた弁当を持ってきやがつて…。

でも、わざと忘れたなんか言つたらたぶんガトリングを蜂の巣にされるんだろうな…。

「『メン』『メン』…あり

後ろを振り向いた俺は田を疑つた。

エプロンを着、三角巾を着けたソフィアは掃除機に乗つてフワフワと上空からやって來たからだ。

「掃除機に乗つてフワフワ来るんじゃねーよー普通、箒とかだらうが！」

つてか、魔法使つなつて言つたろーが…

「お、おい。ヒロ…この人…誰？」

正人が隣にいる事を思い出した！

正人はとこつと、わなわなと肩を震わせてこる。

や、やべえ…。

「ま、マサ。これは何と言つか…。その…」

「可愛い…」

「そ、最近掃除機で空飛ぶのがブームなんだよー……って。え？」

…「マイツの田ん玉は腐れ外道ですか？

「落ち着けマサー！よく見ろマイツのビーツが可愛いんだー！？髪ピンクだぞ？掃除機で浮いてるんだぞ？」

「それでも俺は構わないー！お嬢さん俺と付き合つてー…」

「話しがけるな。下郎が」

ひ、ひでえ…。

「マサの奴、凄い！」へ凹んでる…。

「あ、孝宏さん。はいお弁当ー今度忘れたら…（ジャキッ）…ね  
「は、はいー有り難く食べさせて頂きますーー！」

怖ええよ…。

「お、お前も災難だな……」

「分かつてくれるか……。我が友よ……」

居候が来て一日にして俺は居候に全ての実権を奪われました……。

「ところで、弁当って何が入ってるんだ?」

「飯と……味噌汁と肉厚のステーキ……」

## 第4話・電車サバイバル（前書き）

このネタ…分かる方は多いかと…

## 第4話：電車サバイバル

お世話になりました。平野義宏です。

ガタンゴトン

今、電車に乗ります。  
事の発端は数時間前…。

\* \* \* \* \*

卷之三

卷之三

ソフィアはテレビを指している。  
テレビには電車が映っていた。

この区間をグルッと一周している山田線だ。

「これに乗りたいですう！」

「え」

「乗りたし！ 乗りたし！ 乗らせやん！」  
「行こうか

命が惜しいしね。

でもこの電車、裏の顔があるんだよね。

「わあ～」

ソフィアは目を爛々と輝かせ座席に正座した形で窓の外を覗いている。

見た目、俺と同じ年の女の子が少年少女のよつな姿ではしゃいでいるのは正直恥しい…。

「ソフィア、お願ひだから普通に座ってくれ…。

どうしても外を見たいんならアの前に立つて」

「嫌」

即答ですか…。

俺たちが電車に乗つて5駅目、俄かに周りが殺氣立つ。それを察知したかのように車内放送が流れた。

「まもなく～、肋原～。アバラバラ～。あばらバラバラみたいな  
？（笑）

ケフン～！降り口は左側です」

な、何？この車掌…。

「尚、次の停車駅にてチャレンジクイズを行いますので10分少々停車いたします。

問題は電車がホームに進入次第出題いたします。

正解されました車両から扉を開きます。

今回は早押し、×クイズとなつております。皆様～、頑張つてください」

…出たか。裏の顔…。

この電車 というか路線はたまにこんなふざけた事をやつてくる。それが通勤ラッシュの時も平気でやつてくるから、遅刻者が多数出

てくる。

一部の人間には受けがいいらしいけど…。

「面白そうですねーやりましょー!」

一部の人間。

「問題・都市伝説で有名な『口裂け女』。ある言葉を二回言えば助かると言われています。

その言葉とは何でしょう。答えが分かりましたお客様は、お近くのインター ホンでお答えください」

この問題もおかしいだろ。昭和の匂いがブンブンするぞ…。  
と、ここでメガネをかけた賢そうな男がインター ホンに手をかけた。

「こんな問題簡単ですよー答えは です!」

「はい、不正解です。『同情するなら金をくれ』と言つても、くれるわけ無いでしょ。

馬鹿ですかあなたは」

がっくり頑垂れるメガネの男。  
すんごい言われ様だな…。

結局、5両目に乗つっていた客が正解した。

「それでは最終問題 ×です。問題・私は25歳である。 だと思

う方は1~5両目に、

×だと思う方は6~10両目に移動してください」

分かるわけねーじゃん…。

そんな事を思つてみると電車内で大移動が始まった。

母とばぐれ泣きじやくる子供。

あまりの窮屈さにガトリングを連射する女。

……ガトリングを連射する女！？

「ソフィア！それは置いてこいつて言つただろう！」

「身の安全を守るためにには必要不可欠です！」

そういうしている内に移動時間が終了してしまった。  
結局移動出来ず終いだつたな。

ちなみに今まで1回目になりました。

「正解は…… です！」

おおお！

正解した！

ドアがぶしゅ～と開き、俺たちはいそいそとプラットホームを後に  
する。

はあ……疲れた……。

さてこれからどうしようか。

「私、あのおつきな建物に入りたいです！」

ソフィアが指差した先には大手家電量販店が建っていた。  
まあ、そろそろ新しい炊飯器も欲しかつたし行くか。

俺たちは量販店へと足を伸ばした。

## 第5話 アンソニー

皆さんどうも。平山です。

今、ソフィアと一緒に家電量販店に来ています。

最近、暑くなりましたね。

外に出ると太陽の直射日光に熱風のビル風、アスファルトからの照り返しがキツイです。

お店の中は逆に寒いくらいです。

お店のスタッフ全員防寒着来てます…。

店内にあつた温度計に目をやると… -2 °。

馬鹿だよ！いくら外が暑いからって店内を氷点下にするなんて聞いた事が無いよ！

しかも、お客さん歯をガタガタ言わせながらクーラーとか見てるし。

「う…これは、い…いくらなん…ですか？」

「うちの商品は自動清掃機能が付いておりまして、8万円ですね」

スタッフはにこやかに営業スマイルを振舞つてゐるけど、スタッフは防寒着着用。

客は半袖にハーフパンツ、サンダルという格好だ。

どの国に行つてもこんなアンバランスな接客の様子は無いよな…。

俺らはといふと、淡い暖色系のオーラに包まれていくらか寒さを凌げている。

これがソフィアの魔法の力だそうだ。

大学の時といふと、なんか凄い違和感と好奇心が沸いてくる。

それよりも、周りの反応が気になつたけど、ソフィア曰く、

「外側からは普通にしか見えないんですよ～」らしい。

「孝志さん～…。寒いですぅ…」

「ガマンだガマン。お前もうまい『飯が食いたいだ』り」

「食べたいですけど…。うう…」

「こりやソフィアの方が先に参つてしまいそうだな。  
ちやつちやと炊飯器を買って帰るか。

数分後、俺らはある事に気付いた。

実はここ…クーラー専門店だった！

地上5階あるスペースが全部クーラーもしくは扇風機しか置いてなかつた。

骨折り損じやん。

クレイジー店から戻つた俺たちは街頭でもらつた団扇をパタパタ仰ぎながら

日本一萎える街『肋原』（通称：アバラ）を散策した。

とある兔耳ナースのコスプレをした…お爺ちゃん。

メイド服を着た…お婆ちゃん。

ゴスロリな格好をした…今にもはちきれそうな女性。

路上では街頭プロレスが行われ、そのリングの周りには血溜まりができるでいる。

…普通に見てて怖いよ。

しかも、この街頭プロレスにソフィアも出ると聞いて出したからもつ大変！

「私もこれいでたいですぅー！」

「いや…普通に無理だろ…」

「こんなキモい場所に連れて来られてフラストレーション溜まりまくりです！」

フラストレーションってあーた…。

俺の制止を振り切つてリングに上がるソフィア。

その第一声が、

「ヨロシクお願いします へへ」

なんて言ったもんだから回りの男どもは狂喜乱舞。  
中にはウェーブまでしてくる連中まで出てきた。  
それにして、猫被るといんなにも可愛くなるなんて…。

…はっ！

俺は今何を考えていたんだ！

「お、男のリングに女が上がってくるんじゃねえーー！」

対戦相手（？）は酷く立腹のようだ…。

ソフィアはそんな事お構いなしで男どもに愛嬌たっぷりの笑顔を振り撒いていた。

あ、プロレスラーの肩がフルフル震えてる。

「チエストオオオオー！」

え！？この人鹿児島生まれ！？

何て考えているとレスラーは後ろのロープをバネの様に使いソフィアに突進してくる！

まずい！あいつはまだ男どもに手を振っている最中だ！

「ソフィア！危ない！」

そう言こさる前にソフィアはタンツーと後ろへ飛んだ。背後を取られたレスラーは強張った表情だ。

何があつたの？

リングの真横へ場所を変える。

そこには…。

「そんな攻撃が我輩に通用すると思ったか。若造が！身動き一つでもすればこの『アンソニー』で蜂の巣にするぞ」

レスラーにガトリングを突きつけているソフィアがいました。

つちゅうか、プロレスに銃器は反則だろ！

それに、そのガトリングって名前あつたの！？

死の宣告を受けたレスラーはその場に立つたまま失神して失禁していた。

「はあ～、少しスッキリしました」

だろうね…。

あそこまですれば気分もスッキリするだらうぞ…。

「そのガトリングってアンソニーって言つんだな」

「はいっ！知り合つて間もないんですけど、私の一番信頼できる相棒です　ね、アンソニー」

そう言つとアンソニーに頬擦りをする。

『……少しくすぐつたいたいのだが……』

……今の声誰？

何かドーラン・ールの ルみたいな声したよつた気が……。

「何言つてゐるんですか！私とあなたの仲でしょ、うへ。いいじやないですか、これくらい」

『恥しいのだが……』

「お前、わつきから何独り言つてゐるんだ？」

声の出所が分からぬ……。

ここにどつからこんな声出してゐるんだ？

「え？ 一人じゃないですか？」

と言われる。

俺とソフィアの他に誰がいる？

「アンソニー、『挨拶しなさい』

『平山孝宏殿。お初にお目にかかる。私はアンソニー。我が主の使い魔也』

ガトリングが喋つたあああ！

……つて、何となく予想は付いたや。

でも、あまりにもベタなので口に出すのは即却下したけど。

「所で、さつき《私の一番信頼できる相棒》つて言つたよな？じやあ俺は？」

ちゅうと氣になつたので聞いてみる。

「ん~…。下僕の中では一一番信用しますよ~。」

…俺はガトリング以下なのですか？ソフィアさん…。

そして今日からまた新たな居候が増えました…。  
誰か主役変わつてくんない？

もう疲れたよ…。パ（以下自主規制）。

ガタンゴトノ…。

夕暮れ時の電車。結構風情があります。  
夕日が窓から差し込み、電車の照明なんていろいろいろいろ車内は明  
るく、静かです。

はあ…。何か黄昏たい気分になつてきちゃう。  
俺たちは今、アバラから家に帰る途中です。

ソフィアは俺の肩に寄りかかってお休み中。  
新たに居候になつたアンソニーは無口などいつもから、機能を停止し  
ているのだろう。

ふと横目でソフィアを見る。  
くうくうと寝息を立てていた。  
こづしていれば可愛いのになあ…。  
シャンプーの匂いもまた…。  
…俺は変質者か！

帰つて、夕食の買出しに行つて、それから…。

そんな事を考へてゐる内に俺の意識は睡魔に誘われ、深い闇へと落ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7540a/>

---

空からの贈り物

2010年10月9日20時15分発行